

「第2回女性鑑定人意見交換会」開催

女性活躍のポジティブなロールモデル提示

日本損害鑑定協会

日本損害鑑定協会は2月6日、東京都千代田区の損保会館で「第2回女性鑑定人意見交換会」を開催した。同意見交換会は、女性が働きやすく、長く活躍できる環境整備の重要性が高まっていることを受け、同協会が設置した「女性鑑定人活躍推進ワーキンググループ(WG)」の主導で実施するものだ。今回は「ポジティブなロールモデルの提示」を主眼に据えた構成とし、(株)名鑑の伊藤千加氏、内山鑑定(株)の鶴谷早織氏が登壇して自身のキャリアや体験談について語った。当日の様子はウェブでも配信され、会場37人、ウェブ70人の合計107人の鑑定人が参加した。



(左から) 鶴谷氏、伊藤氏

中堅・ベテランの実例で若手にキャリアの具体像を示す

はじめに登壇した伊藤氏は、入社20年の歩みを具体的に数値とともに示した。担当1件当たりの平均損害額について、入社当初は100万円未満の案件が中心だったが、10年を過ぎた頃から高額案件を担当する機会が増え、現在では1000万円規模に達しているという。伊藤氏は「鑑定人が一人前になるには10年」との先輩の言葉を引きながら、「5年目くらいまでできる気になり、壁にぶつかる。その先の5年が本当の意味での下積み」と語った。また、同期の男性鑑定人との比較も示し、担当損害額の累計に大きな差は見られないと説明した。少額案件を数多く担当するタイプと高額案件を担うタイプに分かれるなど、男女差というよりも個々の志向や特性が色濃く表れるとの見方を示した。

対応についても触れた。「案件が滞留する前に助けを求め」と述べ、上席に早めに相談し、現場対応を調整した上で、算定や報告書作成に集中する時間を確保すること、滞っていた業務を立て直しているとの説明した。また、育児の都合で在宅勤務などの制度を活用する場合には、その分の業務が他のメンバーに及ぶことを意識し、日頃から感謝を伝える姿勢を心掛けていると述べた。

次に登壇した鶴谷氏は、2018年西日本豪雨、22年福島県沖地震など、災害対策室での対応経験を中心に語った。西日本豪雨では入社3年目で企業系チームに配属された。2カ月で約40件を担当し、数千円から1億円規模の案件にも携わった。中でも、病院とグループホームを合わせた1億円の請求があった事案では、82種類の見積書を精査し、固定資産台帳や各種資料を突き合わせながら算定を行った。

次に、立会いや修理業者照会時の話し方については、伊藤氏が「日常の自分よりワントーン低い声で話す」と助言した。相手の職種や雰囲気に応じて言葉遣いを変えることが重要だとし、電話のみでは相手の態度が強くなる場合もあることから、必要に応じて現場で直接対話することで対等な関係を築きやすくなる」と説明した。

また、今回は「座談会」を除き男性も参加可能とした。特にウェブで多くの男性が視聴したことについて、「女性鑑定人が何を考え、どう働いているのかに関心を持ってもらえたことは一つの収穫」と述べた。

携わった。中でも、病院とグループホームを合わせた1億円の請求があった事案では、82種類の見積書を精査し、固定資産台帳や各種資料を突き合わせながら算定を行った。これについて同氏は、「炎天下での連日立会いが過酷だったが、不思議と楽しい記憶として残っている」と述べた。企業契約の構造や付保内容を読み込む経験を積んだことが、その後の業務にも生きていけると振り返った。

福島県沖地震では、地震発生翌日に出張が決定し、自ら航空券と宿泊先を手配したと述べた。1日17件を一人で回る日もあり、精神的に追い込まれる局面もあったという。その中で、立会い前に契約内容や見積書を整理し、想定されるやり取りを事前に準備すること、自分が自信につながったと語った。

現在は支店長代理として駐在と立会い業務を担っている。結婚に伴い往復の通勤時間が約90分増えたが、書面鑑定が多い日はテレワークを活用するなどして対応していると説明した。また、「二等無人航空機操縦士の資格を取得し、ドローンを活用できることを社内外に伝えることで、関連する案件の依頼につながることもある」と述べた。

次に行われた登壇者への質疑では、まず「現場を任されるには何が必要か」が問われた。鶴谷氏は「依頼があれば即応できる状態をつくること」とし、日頃から業務効率化を図り余力を確保することが重要だと述べた。伊藤氏は「保険会社に少額でも声を掛けてほしいと自ら伝えた」という経験を披露し、二ノスを観察し、遠慮されがちの小口案件から信頼を積み重ねたと明かした。

次に、立会いや修理業者照会時の話し方については、伊藤氏が「日常の自分よりワントーン低い声で話す」と助言した。相手の職種や雰囲気に応じて言葉遣いを変えることが重要だとし、電話のみでは相手の態度が強くなる場合もあることから、必要に応じて現場で直接対話することで対等な関係を築きやすくなる」と説明した。

また、若手時代に経験しておいて良かったことを問われると、両氏とも若手期の下積みや大規模災害対応を挙げ、早期に多様な事案へ挑戦することの重要性を強調した。その後、会場の女性鑑定人のみで行う座談会が実施され、「第2回意見交換会」は幕を閉じた。

終了後、WGメンバーで(株)中央損保鑑定の神作美和氏に話を聞いた。第1回は女性の「ライフステージ上の課題」に焦点を当てたが、今回は「実際にどのように活躍しているか」に主眼を置いた点について、「伊藤氏(約20年)、鶴谷氏(10年以上)」という経験年数の異なる登壇者の事例を通じ、若手にキャリアの具体像を示すことを意識した」と語った。